にじのへやだより

令和８年１月発行　　（vol.５）

病児保育室にじのへや
蕨市病児・病後児保育事業

　新年明けましておめでとうございます
新しい一年が皆様にとって笑顔があふれる年になりますようお祈り申し上げます

　年末年始のお休みはいかがでしたでしょうか。お正月休み中のリズムを引きずってしまい生活リズムや体調を崩しやすい時期でもあります。ゆったり身体を休める時間を作りながら無理せず元気に過ごしたいですね。
　今年も保護者の思いに寄り添い、お子さまが安心して過ごせるよう温かい保育・看護に努めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

利用児童の疾患

1.上気道炎	２０名
2.インフルエンザＡ	１５名
3.胃腸炎	４名
4.手足口病	３名
5.流行性角結膜炎	２名
6.溶連菌感染症	２名
7.咽頭炎	１名

利用内訳(年齢別)

11月　利用者数２４名・登録者数４名

０歳	１歳	２歳	３歳	４歳	５歳	６歳	学童
０	２	６	３	４	２	０	７

12月　利用者数２３名・登録者数１名

０歳	１歳	２歳	３歳	４歳	５歳	６歳	学童
０	７	３	６	１	２	０	４

☆今年は例年より早くインフルエンザが流行していますがこれからが冬本番になります。インフルエンザはもちろん溶連菌感染症・感染性胃腸炎が流行する時期でもあるので手洗い・うがいを心掛け、感染予防に努めましょう。
寒くなってくると衣服選びも迷いますね。にじのへやでは温度や湿度管理が一定に保たれていますので、薄手の洋服で大丈夫ですよ！

☆クリスマスの時期に合わせてリースを作りました。
絵の具の付いたビー玉を、自由に転がしながら雪作りを行いそりに乗ったサンタとトナカイを付けて、リースの完成です！

保育の様子

入眠前に絵本を読んで
心を落ち着かせて、、、
おやすみなさい zzz

白い絵の具をつけたビー玉を
段ボールの中にいれて
コロコロ～　コロコロ～♪
リースに雪が降りました

お薬についてQ&A

にじのへやでは、お子さまのお薬をお預かりすることが多いです。
保護者様から寄せられるご質問について、お答えします。

お薬はどうやって保管すればよいのですか？

お薬の保管方法

1.湿気・光・高温を避ける

湿気・高温だと、粉薬が固まったり、お薬が溶けたり、くっついたりしてしまいます。
また、直射日光があたると、お薬成分が変化してしまうことがあります。
避けるべき保管場所：台所・脱衣所(湿気が多い)、車の中(高温になりやすい)、窓際(直射日光があたる)

2.指示された保管「温度」を守る

・室温保存…「室温」とは、１～３０℃です。真夏・真冬以外は、家の中の涼しい場所で保存してよいです。
・冷所保存…「冷所」とは、1～15℃で、冷蔵庫での保存となります。
※冷蔵庫の冷気の吹き出し口付近は、時に０℃以下になり、薬が凍ってしまうことがあります。
冷蔵庫に入れる場合は、ドアポケットや野菜室など、冷えすぎない場所がおすすめです。

3.子どもの手の届かない場所に保管する

「誤飲」の防止のため、お薬は子どもの目線より高い場所、手の届かない場所に保管しましょう。

家に解熱薬がたくさん余っています。
次に子どもが発熱した時に、使ってもよいですか？
そもそも、薬の使用期限って、いつまでなのですか？

お薬の使用期限

1.粉薬(散剤・ドライシロップ)

保管状態が完璧であれば、調剤日から３～6ヶ月程度は使用できます。
粉薬が固まっているなど、変化が見られたら使用しないでください。

2.シロップ(水薬)

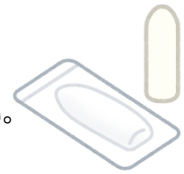
「冷所保存」で約１週間と、使用期限が短いです。シロップは糖分が多く、雑菌が繁殖しやすいためです。
使用期限を過ぎたら、残っていてもすぐに破棄してください。

3.塗り薬(軟膏・クリーム)

・チューブに入った薬
「室温保存」で、未開封なら約６ヵ月～1年、開封した場合は３ヶ月使用できます。
・容器に小分けにされた薬
「室温保存」で約1～2ヵ月程度使用できます。指で直接すくわず、清潔なヘラを使うと長持ちします。

4.目薬・点鼻薬

開封後、約１ヵ月使用できます。特に指示がなければ、「室温保存」です。
遮光袋が渡された場合は、必ずその袋に入れて保管しましょう。



5.坐薬(解熱剤・けいれん予防など)

保管の目安：処方から６ヵ月～1年
保管方法：お薬によって「室温保存」「冷所保存」があるため、必ず確認してください。
室温保存のもの：ダイアップ　冷所保存のもの：アルピニー、アンヒバなど

坐薬は体温で溶けるように作られています。室温保存のものでも、夏場30℃以上になるところに保管していると溶けて使えなくなるので注意してください。「冷所保存」の場合も、冷やしすぎると割れてしまうので、野菜室での保管がよいです。(子どもの手が届かないように、十分注意して保管してください。)

症状が似ていても、自己判断で残り薬を使わないでください。

「同じ症状＝同じ病気」とは限りません。自己判断で残り薬を飲んだことによって、より悪化してしまう可能性があります。また、薬の量は子どもの体重で決まるので、残り薬だと効果が出ないことが考えられます。また、時間の経過とともに、薬が劣化している可能性もあります。

お薬は、その時の病気を治すために「使いきる」のが基本。迷ったら、医師や薬剤師にご相談ください。